

## 景観から景域の形成へ



川崎 雅史氏  
(京都大学大学院助教授)

### 略歴

1961年京都市生まれ。1985年京都大学工学部卒業、1987年同大学院工学研究科修士課程修了。工学博士。同大学工学部助手を経て、1994年より現職。専門は環境と調和する公共空間の景観設計・シビックデザイン研究。

### 景観を守る、育む、つくる

- 景観を守ることについては、新たな法整備も行われ、取り組みの歴史もあり、手法が確立しつつあると考えられる。
- 景観を育むことについては、市民ワーキングなどから始めて法律をつくる例も見られる。市民主導が非常に重要なポイントとなる。
- 景観をつくることについては、デザイナー主導となるが、土木の分野でデザイナーがなかなか育成されていない。
- 都市や風土といったマクロな視野で物を見られるデザイナーが公共事業に参画できるシステムができないか。また、若手の育成なども重要である。

### 公共空間整備の対象

- 公共空間整備の対象としては、橋や駅ターミナルなどの都市インフラ、街路や公園などの公共スペース、河川や港湾などの水辺・ウォーターフロント、まちなみや歴史的環境などの建築群が挙げられる。
- これらを総合的に組み合わせて大きな風景をつくろうという考え方が必要である。

### 景域という領域のまとまりを捉え、つくることが必要

- 橋や道路の形をどうするかだけではなく、質の良い景観がいくつか集まって大きな領域をつくるという考え方方が重要である。
- 景域という領域のまとまりを考えるときに、自然地形や水系などのマクロな自然の力やそれに働きかける人々の人為的なデザインやプランニングを計画の特質として認識し、それを一つの目標像や理念としたと考えている。

### 京都の山辺の景域形成

- 京都では、山裾の緩やかな傾斜地に非常に綺麗な風光明媚な景観、景域が形成されてきた。
- 円山公園では、祇園社の上辺りに真葛ヶ原という野原が広がり、山辺の上部に安養寺や長楽寺などの禅宗寺院があり、山辺から町に至る緩やかな地形構造の上に大きな景域ができ上がっていた。
- 寺院では地形を利用し、少し造成をしながら庭園、開放的な建築物や広場が一体的にデザインされている。また、いくつもの庭園や寺院が広がり非常に大きな景域ができている。

### 円山の景域形成



### 円山地域の断面



- 明治期に上知令により土地が分散し崩れだした景域を、小川治平衛が大きな園路を

設けたり、琵琶湖疏水の水を引いたり、ダイナミックなプランニングにより繋ぎとめた。

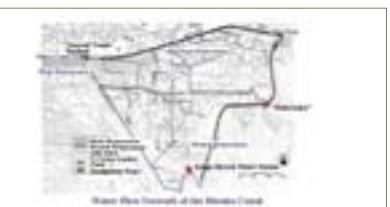


### 京都の水辺の景域形成

- 上賀茂神社のある辺りの明神川の水系を見ると、まず鴨川の上の方から取水し、そこから町の中を抜けて畑に流れ一部が農業用水のように使われ、上賀茂神社の境内に入って神聖な川に変わる。さらに、社家町に入り神官の邸宅の庭園に水を引き入れられる。

- 庭園設計の技法に遣り水という言葉があるが、都市的な視点で見るといろいろと自然との付き合いができる、水辺がいろいろな景域として広がっているような構造を作ることが重要である。

- 琵琶湖疏水ができる時に、南禅寺の天授庵など、塔頭の庭園の水に使われ、鴨東運河を経て鴨川まで流れるといった遣り水の構造ができあがっていた。



### 施設デザインに際して、周辺の自然やまちを含めた景域形成の考え方必要

- 奈良駅前広場のデザインを検討した際、周辺の町や自然との繋がりに配慮したデザインを提案した。
- インフラ整備も都市デザインまで広げてできるよう協力体制がとれないか。シビックデザインの中で最も困難なことかもしれない。
- 借景により緑を重ねていくといったシステム体系を作ることも可能であり、現代的な施設にも広がりのある景域形成という考え方が必要である。

